特別寄書

（本誌上所載論文は凡て署名者の責任にして本會の意見を代表するものに非ず）

精神立國と武德の鍛錬

陸軍大將　本郷房太郎

謹で案ずるに我が神州が武を以て國を建て、之に依て幾千年の光榮ある獨立を完うし、國運の發展を致したことは、之を國史の成迹に徵して、極めて顯著なことである。遠く天祖の御神德、神武天皇の御創業に、我が國の武德の光を仰ぐことは申すまでもない。近く聖明英武なる明治天皇に於かせられては、我が國體を以て「尙武の國體」と仰せられ、夙に徵兵令を布いて國民皆兵の制度を定め、勅諭を下して士氣を作興し、武を練り兵を閲みして、一旦の變に備へさせ給ふことに御心をお盡しになつた。それでこそ幾度かの國難を排して、能く明治時代の國運の大興隆を致したのである。

多年世界の進運から落伍してゐるやうに見えた我が國が、僅々三四十年の間に、一躍して東洋の重鎮となり、世界の勢力となるに至つたといふことは、幾多の外人が世界の奇蹟として、驚異の眼を以て注視したところであつた。そして彼等は從前度外視してゐた我が國の研究に着手することゝなつた。そして其の結論として彼等研究者の一致したところは、我が國運發展の根本の力となつてゐるものは、我が國民の忠愛勇武の精神であるといふことであつた。しかも此の國民精神は一朝一夕にして、作り得るものではなく、我が國多年の歴史が涵養し來つたものであることは、道理の明かなことであつて、其れより武士道、日本魂などいふ語が、遍く世界の通語となつた。

此の我が國民の忠愛勇武の精神卽ち我が國民の武德は決して世界人類の理想たる、かの平和と扞格矛盾するものではない。此の武德こそ世界の平和を確保し人類の福祉を增進するところの大精神たるのである。我が武德は所謂止戈の武である。戰爭を防止するところの力である、更に進んでは橫暴を膺懲し邪氣を鎭定して、仁義を宇內に扶植する所の力である。我が國民の武德を以て、かの陽に人道平和の假面を裝ひながら、陰に侵略併呑の野心を逞しうしようとするものと混同してはならぬ。戰爭にも依らない、軍備をも要しない絕對永久の平和は、人類の均しく望むところであるけれども、其れは實際の人間性からいふと、たゞ夢のやうな空想であると云はなければならぬ。

或る人は云つた。「國として平和を希はぬ國があらうか、人として平和を望まぬ人があらうか、人は死を恐れると同じく、戰亂の慘禍をも忌み恐れる。さりながら、忌み恐れつゝも死から免れ得た人がないと同じく、忌み恐れながらも、戰爭から免れ得た實例はない。世界史は、何れの時代を閲みしてみても其處に戰爭の記錄なき十年を見出すことは出來ぬ。世界史は實に戰記の連續である」と。全く其の通りである。ロンドン・タイムスのレビントン大佐は、彼の大戰を「第一回世界戰爭(The First world war)」と命名した。我が國の一部の人は之を非難したかも知れないが、世界の人は「なるほど適切な名を付けた」と、其の卓見と大膽とに敬服した。吾人は重ねて言ふ、永久平和は固より望ましいことであるけれども、それが古來なかつたやうに、今も現にないやうに、將來に於ても恐らく容易に有り得べからざる事實であると。

世界大戰の慘禍に鑒みて、國際間の平和を維持すべき工夫と努力とは格段の進展を見ることゝなつた。之は洵に當然の事であつて、國際聯盟といひ、仲裁裁判といひ、軍縮會議といひ、皆其の現れならざるものはない。併し其の効果に就いては、俄に平和論者の說を盲信すべきでない。平和論者は斯く言つてゐる。「歐洲大戰後、世界には戰爭が根絕して恒久の平和が齎される。これを保證するものは國際聯盟あり軍縮會議あり、眞に慶賀すべきである」と。果して然るか。

なるほど、彼の歐洲大戰は歐洲の人に、否全世界の凡ての人に、しみ〴〵と戰爭の慘禍を感銘させた。全世界の人は、心の底から戰爭に懲りた。其時「もう、やらんぞ」(Never again!) を叫んだのは、英國人ばかりではなかつた。世界中の凡ての人が皆、全く同一の心であつた。恰度其際だつたから、國際聯盟も軍縮會議も譯なく纏まつた。けれども、兎角、人間の感銘と云ふものは當てにならない。永續きをしない。咽喉元過ぐれば熱さを忘れるといふのは、日本人許りでなく、生きた人間は凡て同じだと見える。やつと大戰が止んだかと思ふと、もう早や、昨日の熱さを忘れて他から餘儀なくされてゞなく、自ら他を餘儀なくせしめて迄も、又々熱いものを呑まうとして居る。世界中の人皆然りで、早くも「もう、やらんぞ」を忘れて居る。大戰後、列國數次の軍縮は、或は軍艦を廢棄し、或は陸軍の常備兵力を縮小したとは云ひ乍ら、既に世間の熟知してゐる通り幾回かの軍縮も畢竟、大戰參加諸國の經濟的疲弊を自ら救はんがため、又軍備競爭に基く國民負擔の過重より免れんとする必然的にして且つ一時的現象に外ならない。世界の現狀が斯くの如くなるに拘らず、どうして戰爭の絕無を保證し得るものぞ。國と國との間の交際に於ては、如何に國際聯盟が成立しても、軍縮が行はれても、不戰條約が結ばれても、どうしても其れによつて解決が出來ぬといふ難問題が生じたならば、結局其の最後に於いて兵力を以て爭はねばならぬ事は、今日に於ても、依然モンテスキューの格言の通りである。又戰爭は正義でなければなら

ぬ、不正義の戰は避けねばならぬといふ者がある。固よりの事であるが、是もパスカルの申した通り「力の伴はざる正義は無力なり、正義の伴はざる力は暴力なり」で先頃の大戰に徵してみても、白耳義と獨逸とのそれが、多言を用ひずして證明してゐるのである。國家はどこまでも正しくなければならぬが、同時に其の正義を貫徹するだけに强くなければならぬ。卽ち國家は正しく且つ强くならなければならぬ、たゞ正しいといふだけでは自ら存立することも出來なくなつてしまふであらう。

故に吾人は常に萬一を覺悟して、何時如何なる一大事が勃發しても、斷じて不覺を取らないだけの用意を切要とする。吾人は元より、吾から事を好むものではないが、萬一非道暴狀を以て挑まれた場合には何時でも蹶起して、堂々正義を主張するだけの氣概と實力とがなければならぬ。でなくば、人としても國としても、生活し存在するの甲斐がない。他から踏みにじられても蹴飛ばされても、如何に侮辱せられても眉毛一つも立て得ずに、お追從笑ひに涙をまぎらして居るやうな意氣地なしで、どうして人間としての生存の甲斐があらうか。屈從に屈從を累ねて、結局强ひて不利の戰爭を買はせられて、そして當然打ち負かされて、戰爭の惡名と其の責任の凡てを負はせられて、勝つた國は常に正義で、負けた國は常に不正義にされる。そして、必ず、戰爭の全責任を負はせられる。そして、一國の風俗習慣を踏破られて、國民性を蹂躙せられて、よし幸に亡國の悲運を免れ得たにしろ、少くも全國民が重大な負擔を課

せられ、塗炭の苦みに虐まれて、夫でも血に泣きながら寢入らねばならぬやうな腑甲斐なさで、何所に國家存立の甲斐があらうか。其時になつて、「我等は平和主義なりしが故に」と、悔んだつて愚痴つたつて、誰が「御尤で御座る」とほめてくれよう。誰が「尊き御心懸け故に」と代つて戰敗國の責任を脊負つてくれよう。もう、泣いても喚いても、間に合はない。敗者の正義呼ばはりは、弱者の悲鳴としか人は聞かない。サア、此時今更ら、誰を怨まうか。凡ての結果は、偶然や突然に天降るものではなく、自らが蒔いた種子から發芽し生育して、終に當然の今日となるのである。今日の結果に對する責任は、昨日原因を作つた自分の外に之を受けるものはない。

孫子は「恃レ有レ待」と戒めて居る。野中の一本杉は、野分の風が如何に荒れ狂うても確乎として倒れぬ迄に、堅固な根張りがなければならぬ。只丈けの高いのみでは價値がない。人でも國でも同じ事である。只徒に無事僥倖を希ふ代りに、何時如何なる事が起らうとも、貧乏搖ぎ一つせぬ丈けの準備を平素から充實して置いて、其の充實した準備を自ら恃み、自ら泰然たり得るのでなければ、確實なる生命を有するものとは云へない。鷸蚌の相爭ふを俟つて自ら利せんとする漁夫が、何うして確實なる生存者であり得よう。彼は賴むべき友ではない。國際均勢の線上に、列强のカネ合ひで漸く無事なるを得て居る國が、何うして確實なる獨立國であり得よう。これは賴もしき友邦ではない。自力でしかも旺盛なる生

命を有するものでこそ、初めて頼むに足るものである。人には侵すべからざる威嚴が具はらなければならぬ。國には侵すべからざる國防力がなければならぬ。

此くの如くに考へてくると、吾人國民はどうしても軍備を怠ることは出來ない。一旦急ある場合に之に應ずるだけの、國際間に一國の獨立を確保するに足るだけの、十分に精鋭なる軍備を整へてゐなければならぬ。且つ軍備は單に戰爭の爲のみの軍備ではなく、之に依つて戰爭を未發に防止し、平和を保障することゝもなるのである。

國際間に紛議が起つて、愈々最後かと思はれる迄差し迫つた場合でも、若し、一方が絶對に有力なる國防を備へて居り、他が到底勝負にならぬ程貧弱な國防しか備へてゐなかつたなら、其外交上の駈引が如何に强硬に見えても、終には弱者の方が屈服して、事は兵火を待たずに解決するものである。卽ち國際の紛議が切迫した場合、之を火にするか水にするかは、一に背後に控へてゐる所の國防力如何に依つて決するものである。それは當然の事で、國と國とが相爭ふ以上、双方共に相當の理由がある筈で、互に其主張を枉げないのは、我が爭ふ力が彼の拒む力に勝ると自信すればこそである。反對に、彼の國防力が完備し充實し、我が如何に爭ふとも、力が到底及ばないと認めた場合には、誰が何を苦んでか、國家の生命を賭して爭を敢へてしようぞ。であるから武は平和の保障である、國防の完備は、戰爭を未然

に防止するものである。斯くてこそ、初めて國防は最上乘を得たものとなるのである。

理想は常に最上乘を選ばなければならぬ、吾人の國防は戰はずして事足る迄に完備させなければならぬ。然らば如何にせば、左樣の理想的國防が成し得られるのであらうか、答は至つて簡單明瞭である。曰く、それは全國民を訓練して、其の各個人を完全なる人格者たらしめ、國家總動員の必要に應ぜしめることであると。往昔は武門武士なる階級が存して國防に任じてゐたが、今日は全國のあらゆる力を擧げて國民的國防をやらねばならぬ時代となつて居る。今日の戰爭は決して陸海軍のみの戰爭ではない、實に國民全體の戰爭である。擧國一致、萬民協力、懸命に奮鬪してこそ、始めて終局の勝利は得られるのである。國家總動員の必要が此處に生じ、從つて平常より是れが整備に遺憾なきを要する。そして國家總動員の完全を期する爲には、先づ國民個々の動員準備を完全にせねばならぬといふことは、至つて道理の明かなことである。然らば各個人の動員準備とは何であるかといふと、常にその精神と身體とを健全にする以外に道はない。精鋭なる國軍は健全なる國民によつて組織せられるのであるから、國民各個人の健全は、國民全體の健全であり、國民全體の健全は國軍の精鋭となるのである。一人一個の人格的鍛錬の緊要なること以て察すべきではないか。

抑も國防の要素となるものは何であらうかと詮議してみると、凡そ人と物と事との三つに分けること

ができる。物と總稱するのは、兵器・彈藥・器具・材料・糧秣・被服等の直接軍需品。夫等軍需品を製造すべき銅とか鐵とか棉花とかの諸原料、それ等原料を以て軍需品を製造するに必要なる機械器具乃至石炭・石油・ガソリン・藥品など一切の物資。尙其等軍需品以外、全國民の生活及び活動に要する凡ての物及び軍用民用一切の動物・植物・鑛物等であるが、完全なる國防の爲には、夫等の凡ての物と云ふ物が完全に良好であらねばならず、又夫等が內地に於て豐富に生產せられ、若くは十分に貯藏せられて居ることを要する。次に事と云ふ一切の事——軍政、軍制に係る指揮、統御、通信、連絡は云ふ迄もなく、其他政治、敎育、衞生、產業、運輸、交通等一切の事、夫等が平時は固より戰時に在つても、一絲亂れず正整確實に圓滑に敏活に活動し運轉されねば、完全なる國防は望まれない。が併し、夫等一切の物、夫等一切の事は皆死物で、活きた人卽ち國民を待つて初めて活用せられ運用せられるものであるから、人が根本の問題となる。人其人を得さへすれば、假令、物に足らない物があり、事に足らない事があつても、如何樣にも之を補ひ之を改善する事が出來る。であるから、物・事・人を國防の三要素と申すものゝ、更に煎じ詰めると、最初に申した如く國防の完備は國民の各一人を完全に練成することに依つて得られると結論しても差支がない。今日國防を擔任する者は、老衰者ならざる限り、幼少者ならざる限り、不具癈疾者ならざる限り、苟も國民たるものは、只の一人も缺くる事なく、國民全員であらね

ばならぬ事を注意して置く必要がある。先づ之を戰時に見るべきである。戰線に立つべき者は啻に軍人のみでない。最近世界大戰が明確に敎誨した通り、嘗て只の一度も軍隊敎育を受けなかつたもの迄、男子といふ男子の大多數は、皆戰線に立たねばならぬ。其他の國民も或は物を製造する仕事なり、或は事を處理する役目なり、或は其物を造り事を扱ふ人を養ふなり、何なり斯なり、必ず一定の仕事を擔任せねばならぬ。而して之を更に平時にみると、其の戰線に立つべき多數の國民は、皆鄕に在つて常業に就き、或は物を造り、或は事を處し、以て國家の富を增し、兵を强くし、國防の實力を培殖蓄積するのである。

斯く國防の三要素として物と事と人との三つを擧げ、その根本は人に在りとするものであるが、吾人は又國家總動員の準備として四大事項を列擧する。其の第一は國民の精神力を涵養する事。第二は國民の召集力を多くする事。第三は國民の富の力を殖す事。第四は國民の工業力を增す事。此の四つのものが完備して初めて國防の實が擧るのである。

國家總動員の準備として、第一の國民の精神力を涵養することが最も根本的な緊要事であることは、改めて申すまでもない。義勇忠烈以て公に奉ずるの堅固な精神が涵養せられ、之に加ふるに强健なる體力の鍛錬を以てし、心身兼備の國民が、全國の津々浦々に充ちて居たなれば、たとひ平時は軍縮をしても

いざ鎌倉といふ場合には、立派な人格ある壯丁が第一線に立ち、所謂良民良兵の實が擧り、自然に第二の召集力が多くなるわけで、是程經濟的な軍備はないのである。そこで心身共に立派な國民各個人が出來上つたならば、是等が集つて一隊となり、遂に大團體となり、國家總動員の準備が完全に出來上るのである。この國民各個人の基礎が組織的に出來上つて居たならば、啻に有事の日に於ける準備のみならず日常百般のこと、產業の發達でも、工業の進步でも、將た現今最も腐敗せる政治の改良でも、何でも出來ざることはないのである。所謂平戰兩時の用をなすもので、吾人は之を精神立國と稱する。先づ此の精神立國が出來れば、產業立國でも工業立國でも容易なのである。確乎たる信念を以て、一生懸命に工夫して他に負けぬやう、熱心に働きさへすれば、何事でも成功せぬことはない。斯くすればやがて第三の富の力も增加し、第四の工業の力も進步する。國民各個人が先づ立派な精神と體力とを具へて、此に團體の基礎が立ち、團體として立派に國防の準備が出來たる上、之に富の力と工業の力が加はれば、所謂鬼に金棒で始めて國家總動員の準備が完成したと云ひ得られるのである。

吾人は更に一步を進めて國民各個人の人格を國家的に訓練養成することの肝要を力說したい。日露戰爭當時のロシアの總司令官クロパトキン將軍が、「日本に戰さに負けたのは、日本では子供の時分から、その對手に對して決して負けないといふ個人の身心を鍛錬して居るが、ロシアに於ては團體競技の方に

力を用ひて個人の身心を鍛錬することを忘つた。是が戰敗の主なる原因である」といふ意味のことを彼の回想錄に書いて居る。革命後のロシアの有樣はどうであるか。ロシアの總人口は約一億四千萬人であるが、その中共產黨員が約九十三萬人、準共產黨員を入れても百四十萬くらゐ、是に一億四千萬の者が皆引摺られてゆくといふのは、國家組織の上に於て、國家本位な個人の人格が出來て居ない證據である。若し多數の者が、愛國の精神を個人々々に持つて居つて、是が團結して少數の共產黨員に當つたならば、決して敵し得ないことはない。然るに、少數の者に多數の者が引摺られて行くといふことは、卽ち、一人一個の身心の鍛錬が、國家的に出來てゐない爲に、斯ういふ運命になるのである。支那の人口は約四億あつて、唐虞の時代から年を經ること四千歲、人倫道德を重んじて、昔は風俗の厚い國であつた、孔子の遺書と稱する『大學』を繙いてみても、『先づ身を修め家を齊へ國を治め天下を平にす』といふ風に書いてある。身を修めずして家が齊ふといふことはない。又家も齊はないやうな者が國を治めやうとしても治まるものではない。從つて天下が平かにならないことは分つてゐる。その後、支那には暴君汚吏が出て、段々に古來よりの美俗を紊して行つて、今日の如きは、知識階級の者は至つて少數で、しかもそれが國家を忘れて自己本位に走り、兄弟牆に鬩いで諸種の戰亂が絕えず、多數の人民は塗炭に苦み、苛酷に誅求せられて、實に愍れなる境遇に居る。是もやはりロシアと同じく、國家的に統一せら

れたる方針なく、四億の民は居りながら、それが共同一致して國を護るといふ力がない爲に、少數の者に引摺られたり、搔き亂されたりするのである。我が國の日本晴れも稍〻曇りかゝつてきた。天の未だ陰雨せざるに先立つて、その牖戸を綢繆するといふ考がなければ、殷鑑遠からず、眞に寒心に堪へないのである。

立派な精神と身體とを兼備した國家的人格者を訓練するには、我が國幾千年來の傳統を有する武道の修行に如くものはない。大和魂なる我が國民精神は、建國の歷史と共に我が皇國の天地に磅礴する靈氣が自然に國民の頭に宿り血管に流れ込み骨肉に浸み込んで育成したもので、本來先天的のものである。其の先天的の精神が、更に武德——卽ち神武天皇がそれを以て中州を戡定し給ふて以來、赫灼たる光輝を放つてゐる武德——として鍛錬せられ、中世からは、特に武士道と銘打つて益々砥礪せられ、愈々淨化せられ、親が子に、子が孫にと傳へる中に、何時しか是も亦先天的といふべきものになつて、遂に世界一を誇るべき迄に完成せられたるものである。實に此の往昔の武士は、武道に依つて武士たるの心魂を修養し、武士に必要なる兵術戰技を練磨して以て國防の重任に當つた。かゝるが故に忠孝信義の精神に篤く、廉恥を重んじて禮節を貴び、弓馬刀槍の術に秀いでゝ遺憾がなかつた。彼等武士より成れる我が國軍が勇敢で精銳であつたことは決して偶然でない。

然しながら現在の國軍は、武士てふ特殊階級を以て編成されない。國民皆兵である、國民卽ち國軍である。武士道は國民道となり、武士道の敎育は國民道德の敎育とならねばならぬ。故に國民たるものは武士の歷史を承繼し、道德によつて其の精神其の武德を鍛錬して、宜しく自ら往昔の武士たらんことを心がけ、鄕にありては良民、軍に從へば良兵たるの境地に達しなければならぬ。

今日の國民が劍道・柔道又は弓道等の往昔に發達した武道に依つて、身心を鍛錬するといふことに就いては、種々の誤解を生ずるものがあるから、吾人は十分に其の意義を明かにして置かねばならぬ。今日ばかりでなく、古に於いても「劍は一人の敵のみ、千軍萬馬の將たる者が、何しか之を學ぶべき」と貶した古英雄もあつた。が、公平に之を評すれば、夫は負け惜みの强辯か、或は又劍道の本義を知らない者の傲語に過ぎない。なぜなら一人を敵とする其の劍術が、萬人を敵とする戰術、百萬人を制する大戰略と、其の本義に於いて寸分の差もない味ひを悟るならば、如何に百萬兵馬の將としても、尙ほ之を修練するの價値が十分なることを悟らねばならぬのである。況して武術の修行は、一人の敵と相爭ふよりも、更に貴重なる人格鍛錬の好手段で、其の人格鍛錬は大將帥たればたる程、益々重要なる條件たるに於てをやではないか。

又「今日將來の戰爭は、空中戰、地中戰乃至水中戰、たま〳〵地上に於てするものは最大遠距離戰、

凡て是機械戰、科學戰であるに、何を苦んでか今の世に、骨董的古武藝を弄ぶの必要があらう。頑迷者流の偏見も亦笑ふべきである」と嘲る新人もある。が、これは又全く戰爭なるものゝ眞の味ひを知らない爲の盲蛇的詭辯である。宜しく考へて見るべきである。戰爭が如何に科學戰になり機械戰になつたとしても、其の科學を應用し其の機械を活用するものは何であるか、幾百千年の後に至つても、夫は依然として人間であらねばならぬではないか。而して、武道の修行は人間を鍛錬して、如何なる危急の場合に際しても、尙ほ毅然として惑はず周章てず、泰然自若、機械や科學の効用を寸毫の遺漏もなく竭し得る如き人格を練成するの方便ではないか。

武術の歷史は舊く、武器の進歩に從つて其の變遷もある。けれども科學の進歩に伴ひ武器が如何に精巧になつたとしても、所詮武器は死物たるに止まり、これを活用するは一に其の人の精神に存する。武器は變つても、之を活用する根本精神は古今を通じて一貫し、毫末も變化を認めないばかりか、愈々研磨砥礪せられて、益々光輝を發揚すべきものである。そして此の根本精神を練磨するものは我が國古來の武道に如くものはない。

加之、將來科學が如何に發達し、機械が如何に進歩しても、最後の決戰は其の機械や科學のみで遂行せられ得るものでなく、矢張り、活きた人間でなければならぬ、肉彈でなければならぬといふことは、

最近の大戰に於ても雄辯に證明せられ敎誨せられたのである。近頃武道嫌ひの人が、私に向ひ、本郷は熱心に昔の武道を奬勵してゐるが、柔道や劍道などは肉彈戰の準備ではないか、今日の如く科學が發達し兵器が進歩してゐる世の中に、肉彈戰の稽古などは時代後れで、スポーツさへやればよいではないかと言つた。けれども之は誤解である。成る程今は機械戰の世の中で、最初から肉彈を以て機械と戰ふやうな愚なことはせず、必ず科學の進歩を圖つて精巧なる兵器を造り機械戰は機械戰で負けぬやうにせねばならぬ。が、勝敗の岐れる最後の決戰とならば、世界戰に徵するも、矢張り肉彈戰人間戰である。武道の鍛錬が出來てゐて献身的な愛國の精神が充ちてゐる個人の集團でなければ、到底最後の月桂冠は得られないのである。從來科學の進歩に連れて武器は進歩してきた。我が國で云へば昔は弓矢であつたものが、刀となり、槍となり、銃砲に移り、今日では飛行機、戰車、毒瓦斯、電氣の世の中となつたけれども、結局は肉彈戰である。眞に今日の戰爭は、一見機械萬能の感がするけれども、實際は必ずしもさうではない。砲戰に始まり、次いで小銃戰、機關銃戰となり、種々の科學的方法に依る戰鬪となつても、最後の突擊前進となるや、其處に各人各個の刀劍を以てする格鬪は敢行せられて劍道や銃劍術戰となり、遂には組みつ組まれつする柔道戰を演出するに至るのである。

我國も日清日露の兩戰役時代には思想界も現今の如く惡化せず、兵役も三年であつたから、隨つてよ

く訓練もせられ、戰鬪能力もあつたが、近來はこの兵役年限も短縮せられ、世の趨勢につれて、戰鬪能力も自ら減じて居りはせぬかと憂慮せられる。故に將來現役軍人、在鄕軍人、青年團、學校訓練なども擧つて、前にも申した通り形而下形而上共に、武道の精神を以て先づ個人の精神を鍛へあげて置かねば實に安心がならぬのである。世界戰後英國や米國などでは、歩兵の肉彈戰は、到底機械戰には叶はぬものと頗る輕視してゐたのであるが、一昨々年の三月、亞米利加合衆國の陸軍省は、六年の經驗に依つて聲明書を出してゐる。其の要旨は、戰爭に第一に必要なるは人間である。人間は如何に精巧なる機械を以てしても、之を補充することはできない。將來の戰爭も最後の決勝は、矢張り歩兵の銃劍戰であつて精巧なる兵器を携へて居る兵種も、畢竟之が協力援助をなすものであるといふてゐる。彼の工業力萬能富力萬能の米國が既に此の點に着意し、精神立國の必要を叫び、各個人を鍛錬して其の格鬪力を養成せんとしつゝあるのである。そして現に歐米諸國に於いては、盛に我が國の柔道劍道を研究し、其の長所を取入れようとしてゐることを聞及んでゐる。然るに其の本家本元たる我が國に於いて、富の力も工業の力も、遠く諸外國に及ばず、賴む所は唯武道の精神である我が國に於て、國粹中の最精華たるこの精神の普及を閑却して、他國の糟粕を嘗めんとする傾あるは、國民の猛省一番を要する所である。

今日に於いて吾人が劍道柔道等の武道の修行を奬勵することは、決して徒爾ではない。況んや此等武

道に依つて精神を修養錬磨し、以て武士道の眞髓を極むるに於てをやである。競技（スポーツ）の隆盛は大に慶賀すべきである。而も總ての運動競技も亦、この武道の精神を以て精神とすべきことを忘れてはならぬ。

今日武道の修行は、此くの如き高遠なる國家的意義精神的意義を有するものであるから、吾人は更に國民的自覺を明確にし、國體信念を强固にし、以て國民精神を作興し、眞に精神立國の實を擧げてゆかなければならぬ。今や我が國は國際的に焦眉の急に切迫して居るのみならず、精神的に重大なる危機に直面して居る。

元來教育は智育、德育、體育相俟つて、各方面に立派な人格を具へた國家有用の國民を養成することが目的である。然るに我が維新後の教育は、智能に偏し、物質文明の方面に於ては相當に見るべきものもあるのであるが、德性の涵養を閑却した結果、人心が動もすれば輕佻浮薄に陷り、質實剛健・勤儉力行の氣風が漸次に衰へてきたのは洵に嘆息の至りである。我が皇國では昔から皇室に對して非望な覬覦を敢てした者は、惟神の道に同化すべき筈の印度佛教を誤解し、誤解の結果是に中毒したる妖僧道鏡や、自分が偉ければ天子の位にでも卽けるかの如く間違つた夢を見た大馬鹿者の平將門の二人があつたが、是等は所謂天誅踵を廻らさずで、道鏡は貶謫せられ、將門は誅滅されてしまつた。その後皇位に對する不敬罪は絕えてなかつたのである。我々はロシアには虛無黨共產黨などいふものがあると云ふので、非

常に不思議な事のやうに考へてゐたのであるが、輓近幸德事件あり、その後虎の門事件があり、昨年から引續いて澤山の主義者が檢擧せられ、その中には多數の學生もあるといふことで、しかも、其學生等は、學術方面に於ては皆優秀なもので、學校の成績の惡いといふ者は少いといふことを傳聞する。併し學生中、武道を鍛錬したる者には、主義の爲に赤くなつたといふ者はないといふことを耳にするのは、洵に欣ばしいことである。皇室を中心にして君民一體で立つ我が國體の精華は、誰しも小學時分から、教育勅語を習つて十分に知つて居るわけであるけれども、是が一つの信仰となつてゐない爲に赤くなり易いのである。信仰になつて居りさへすれば、決して非國家的・反國體的な險惡な思潮に惑溺するやうなことはないのである。武道の精神を以て心身を鍛錬して、さうして國體の精華といふことがよく頭の中に體得されて、强い信仰になつておれば、決して斯ういふことはないと信ずる。主義者を檢擧したり、緊急勅令を發したりしても、是等は皆既に赤くなつた者に施す手段であつて、根本的にその絶滅を圖るには、どうしても教育の基礎から建直してゆかなければならぬ。吾人は決してたゞ一概に外來思想を排斥しようとするものではない。皇國では昔より外來思想を克く包容同化し來つたのである。卽ち支那の二元三元の忠も日本に入り來つては、仁德天皇の御代以來一元の忠となり、印度の佛教も聖德太子のお力で小乘佛教が傳はらず、大乘佛教が惟神の道に同化して傳はつたから、害が尠かつたのである。今の

外來思想でも頭から排斥せず、清濁併せ呑むの雅量を以て之に接し、良い處は之を採り惡い處は採らねばよいと思ふ。要するに食はず嫌ひも丸呑みも共によろしくない。我が國體の精華さへ一つの信仰となつて居れば、決して赤くなつたり紫になつたりするものではない。

さて武道の修行には種々の心得を要するのであるが、此に其の最も重要なものを列擧すると、第一には眞劍なるべきことである。第二には日本武道の特色たる攻擊精神を發揮すべきことである。第三には勝負の公正なるべきことである。第四には錬磨の功を積んで武道の精神に通達すべきことである。以下少しく此等の要項に就いて說明を加へて置かう。

抑も武道とは、その種類の如何を問はず、等しく敵手に對する攻擊であつて、攻擊とは結局敵を斃すに非ざれば自ら斃れて後止むことである。平たく云へば命の遣り取りをすることである。人生是れ以上の眞面目なことがあらうか。眞劍なことがあらうか。平素の修業に於ては、實際に命の遣り取りをこそしないが、その精神的本質に至つては全然同一である。故に一度起つて敵手と對峙するや、徹頭徹尾眞劍勝負の感念を以て、眞面目に終始しなければならぬ。一瞬の油斷も敗北となることを膽に銘し、全精神をこめて奮鬪しなければならぬ。

元來、男子が一度劍を拔いた以上は、劍光一閃、敵を殺すか敵に殺さるるか、二者其の一に決せねば

ならぬ。卽ち兵は一人を敵とすれば一人の命懸けであり、千萬人を敵とすれば千萬人の命懸けであり、一國を敵とすれば一國の命懸けである。夫程に眞劍であればこそ、其の修行が直ちに人格鍛錬の第一手段ともなるのである。であるから、吾人が武道を修行する場合には、よし竹刀を執つてする稽古でも、其の竹刀は眞劍であつて、其の一擊は死生の界を定めるものだといふ觀念を失はず、滿心の氣合を傾注し、敵が若し我が脾腹三寸に切り込むなら、吾は彼の腦天八寸を打ち碎かう、敵が若し其の鍔元で我が一刀を防ぐならば、吾は其の鍔共に踵迄兩斷してくれよう、の慨を以て、切り込まねばならぬ。若し夫れ、卑劣なる小術策を弄するが如きは、よし成功し奇勝を得たとしても、其の成功は男子の恥辱、正々堂々として敗れた一刀の方が遙に貴いといふだけの自尊心がなければならぬ。實に昔の武士道はさうであつた。

然るに、當時はこれさへも變つて、徒に形の上に勝敗をのみ爭ひ、眞に切れるか切れないかをも顧みず、或は筈の先で糊をつけるやうな眞似をしてみたり、或は漸く劍尖が敵に觸れたか觸れぬかさへ定かならぬに、只掛け聲許りを大きくして身を引き刀を差上げ、甚しきは敵に背を向けて驚喜の狂態を演じたりするものがある。元來彼の如き狂態は、武道衰滅時代の悲しき記念である。卽ち昔は絕えてなかつた事で、後世武道の最も衰へた江戸時代の末期に始まり、殊に御一新後例の文明開化風で武道が凋落し

た時代に甚しくなつたことである。當時武術家が衣食にすら窮するやうになつた結果、人の盛り場例へば淺草公園などで、角力などと同樣に小屋掛けをして木戸錢を取り、そして劍術の勝負を客に觀せる迄に下落したものであつた。さうなつた以上、勝負を派手にし面白く見せて觀客を樂しまさねばならぬといふ所謂興行政策に副はん爲に、夫も未だ精神の鍛錬の足らない劍士が恥を忍び其の自尊心を抛げて、下劣なる藝人振りを敢てしたものであつた。然るに夫がいつしか全國に擴がり、遂には勝負仕合ひの一形式の如くなり、只今では各地の演武場に於て屢々此の狂態が目擊せられるやうになつたのである。之は云ふ迄もなく、武道の眞髓に反したもの、邪道に陷つたものである。吾人は繰返し又繰返して宣言する。精神は精神を以てのみ鍛はれるものである。精神が到らないでどうして精神の鍛錬が出來ようぞ。吾人は絕對に、彼の精神の拔けた武術の弄びを排し、特に引上げの狂態を演ずるが如き邪道を斥けねばならぬ。故に昭和二年より武德會では審判規則を改正して、嚴に引上の禁止を勵行して居る。劍道試合に於て一擊の後、殘心の構をなさず、審判員がありながら、演武者の自畫自賛で敵に背をみせて引上をなすが如き、又近代柔道試合に於て、總てのわざを研究せず、寢業のみを專にして、攻擊態度を失ふが如きは、大いに之を戒めねばならぬことゝしてゐる。唯競技に勝ちさへすれば如何なる動作をしても頓着せざるが如きは、武道の精神に背くことの甚だしいものである。

近來盛んに行はれるやうになつたスポーツも、徒らに一場の興味を追ふところの遊戯たるに偏せず、武道の精神を以てやるならば、武道と併用して頗る有益である。走る事、投げる事、蹴る事、飛ぶ事、泳ぐ事等は皆スポーツの長所である。是等も劍道、柔道、銃劍術等と同じく、武道の精神を以て鍛へておくことが、平戰兩時共に必要である。頃者學校等に於ける運動競技を見るに、優秀なる小數の選手を養成して、其の團體の名聲を博する事にのみ腐心し、一般の學生等は、各自に體育を行ひ、心身の鍛錬をなさないで、唯選手の聲援にのみ熱狂是れ努むるが如きは此の際大いに考慮すべき事であつて、この間に米國流の弊害も往々認められる所である。各部に於て專門家を養成する事は別として、國家組織の上からいふと、一人でも多く心身の鍛錬をなしたる立派な國民を作り、有意義に平戰兩時の用に資する目的で進みたいのである。今日も良選手の行ふ野球等の團體競技を見るに、頗る熱心にして克く協同動作も行はれつゝあるが、吾人は更に武士道的に其れに鍛錬を加へ度いと思ふ。近時海外の競技精神を傳へ、勝負の公正を唱へる者があるけれども、これは我が國の武士道が夙に鍛錬し來れる所であつて、更に他に假るべくもない。寧ろ進んで外來のスポーツを武士道化してゆかなければならぬ。今日のスポーツの選手等がとかく興行的な見せ物をするやうな傾向に陷り易く、少しく負け氣味となると忽ち意氣が沮喪して攻擊精神を失ひ、動作技術も錯亂して確實に行はれず、一敗するとメソ〳〵泣き出して、昔の

武士の少年までが恥としたことを意に介しないやうな風があるのは、武士的精神を以て之を鍛錬する必要が存する。

我が國の武道はスポーツに對しても、此くの如き使命を有するのであるから、武道其の者の試合に就いては、十分に自重して、其の餘弊を生じないやうに意を用ひなければならぬ。

近頃の武道の團體試合中往々自分が負けると、其の團體の名譽上、大に責任があることを顧慮して、主として攻擊動作に出でず、動もすれば引分けを欲するが如き傾があるは、知らず識らず勝負に偏して其の弊に陷つてゐるものであつて、團體試合に於ては殊に相戒め、斯道の精神を發揮することに努めねばならぬ。

近來戸山學校に於て、武道とスポーツの併用に就て研究せられつゝあるは、洵に結構な事である。將來我が武道の精神を以て、其の技術は双方の長所を採りて、研究を進めたならば、大いに得る所があるであらう。我が陸海軍で最初に採用した洋式の劍術は、佛蘭西や獨逸其儘のもので、先づ初から防いでかゝる方法もあつたが、元來日本刀は古人も云つた通り、斬る爲に作られたもので、防ぐ爲の兵器として造られて居ない。諸流の劍道共に皆攻擊精神が主であつて、敵と對すれば、先づ自分より攻擊に出で、若し敵より先んじらるれば、防ぐとは云はないで、刀をすりあげて直ぐ攻擊に轉ずるのが通例である。

故に飜譯語には防具とあるも、我が國では昔より武具又は道具と唱へ來つたものである。日露戰役後、私が教育總監部本部長でゐた頃、從來の各兵種の操典が、日本獨特の攻擊精神を本義とするものに改められたるに依り、劍術教範も亦、歐洲の糟粕を嘗めないで、攻擊精神を以て凡てを律せられ、徒步兵の爲には雙手劍術が再興せられたのである。何をやるにも先づ個人の心身を鍛錬し、攻擊精神を以てかゝれば成し遂げ得らると信ずるのである。

斯く武道は精神的に修行せらるべきものであるけれども、一面から見ると、其の技術の修行を積み、工夫鍛錬を重ねる間に、精神も次第に修養されてくるものである。吾人は武技に依つて道に入り德に達し、深く神に通ずることも出來るのである。故に武道を學ぶものは實地の修行鍛錬に忘りがあつてはならぬ。實地に努力を積めば積む程、其の技術ばかりでなく、精神上にも必ず其の進境の見るべきものがあつて、其の人格を練成するのである。

昭和四年五月、尙武に因める端午の節句を卜して宮內省に於て御大典記念　天覽演武試合を催されたるは、洵に有難き極みで、實に桓武天皇延曆以來未曾有の盛事に屬する。之に依つて　陛下の御思召の程も拜察し奉ることができるので、爾來全國に翕然として武道尊重の思想が勃興し、予の會長たる武德會に於ても、各府縣の支部並に支所に於て、續々武德殿の新築改築の竣工及會員の增加の報告に接する

は眞に快心の至りである。又同年秋、特別大演習の際、茨城縣武德會支部の新築武德殿に於て、初て劍道柔道弓道の　天覽があつたのは、武德會の光榮とする所である。吾人は此の機を逸せず、益々全國に武道の精神を普及して、先づ國民各個人の心身の鍛錬を奬勵し國民精神の作興と思想善導とを圖り、上下協力一致して、異日の準備をなすことを目下の最大急務としなければならぬ。

世界戰後、獨逸が戰敗の結果、軍縮を餘儀なくせられ、諸種の運動競技を熱心に勵行して、心身を鍛錬し國力の發展を圖りつゝあるに鑑みれば、思半に過ぐるものがあるであらう。武德會の一般會員が武道を鍛錬する方法は、全國各支部や支所の武德殿を開放するの外、各府縣主なる町村の到る處に、緊縮の今日バラック式の道場を作り、各自業務の餘暇爰に集まりて修行をなし、學校方面に於ては、學校の道場等に於て、スポーツ野球部水泳部等の如く、柔道部劍道部等を設けて、其の部の先輩が後輩を導き、卒業の際は會員となりて武德會の道場にくるか、或は母校に時々集まりて練習するも可なりであらう。何れにしても、吾人は全國民の自覺と努力とに依つて、斯道の大いに興隆せんことを切望して已まないものである。